



文化財愛護  
シンボルマーク

# 柴 古 墳 群

1985年3月

松江市教育委員会

## 凡　　例

1. 本書は、松江市教育委員会が豊和産業有限会社から委託を受け、昭和59年10月1日から昭和59年10月31日までの内、計24日間を要して行なった柴古墳群の発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

|        |                           |
|--------|---------------------------|
| 委　　託　者 | 豊和産業有限会社                  |
|        | 代表取締役 木　村　勝　吉             |
| 受　　託　者 | 松　江　市                     |
|        | 代表者 松江市長 中　村　芳二郎          |
| 主　　体　者 | 松江市教育委員会教育長 内　田　榮         |
| 事　　務　局 | 松江市教育委員会社会教育課             |
| 総　　括   | 社会教育課長 野　津　久　夫            |
| 兼務会計   | 社会教育係長 中　西　宏　次            |
|        | 社会教育係主事 菅　井　純　子           |
| 担　　当　者 | 文化係長 岡　崎　雄二郎              |
|        | 文化係主事 中　尾　秀　信             |
|        | 松江市立女子高等学校常勤講師<br>井　上　寛　光 |

3. 本書の執筆は、担当者が協議しておこない、これを岡崎・井上がまとめた。
4. 本書に使用した実測図の作成・浮書・写真は、すべて井上が担当した。
5. 発掘調査にあたり、豊和産業有限会社から多人なる御協力を得た。記して謝意を表する次第である。
6. 出土遺物の検討については、島根県教育委員会文化課主事川原和人・松本岩雄の両氏から有益な御教示を得た。記して感謝する次第である。

## 目 次

|               |    |
|---------------|----|
| I 調査に至る経緯     | 1  |
| II 位置と歴史的環境   | 1  |
| III 調査の概要     | 3  |
| (1) 第1号墳      | 3  |
| ア 墳丘の構造       | 3  |
| イ 遺構          | 3  |
| ウ 遺物          | 3  |
| (2) 第2号墳      | 3  |
| ア 墳丘の構造       | 3  |
| イ 遺構          | 4  |
| ウ 遺物          | 13 |
| (3) 第3号墳      | 13 |
| ア 墳丘の構造       | 13 |
| イ 遺構          | 14 |
| ウ 遺物          | 15 |
| (4) A・B・C・D地区 | 15 |
| ア A・B地区       | 15 |
| イ C・D地区       | 15 |
| ウ 遺物          | 18 |
| IV 小 結        | 18 |
| (1) 遺物と遺構の検討  | 18 |
| ア 遺物の検討       | 18 |
| イ 遺構の検討       | 19 |
| (2) 周辺遺跡との関連  | 19 |

### 文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である「柱」、すなわち「竿」と「縄」の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす想物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくうといいうものです。



## I 調査に至る経緯

柴古墳群は、松江市教育委員会が昭和51年度に実施した分布調査によって「山崎古墳」と共に確認されていた（注1）。その後、昭和57年10月に豊和産業有限会社から本古墳群を含む一帯の山林約9,900m<sup>2</sup>を住宅団地（仮称学園台団地）として造成したいとの協議があり、昭和58年度の第一期工事にかかる「山崎古墳」については、同年4月25日から同年5月31日まで調査を実施したところである。

昭和59年に至り、この住宅団地の東側山林約1,400m<sup>2</sup>を伐採し第二期工事を開始したいとの協議があり、事前に本古墳群を発掘調査して価値を確かめることになった。

調査は、昭和59年10月1日から同年10月31日まで実施した。その後、担当者が出土遺物や図面の整理作業をおこなって完了した。

## II 位置と歴史的環境

本古墳群は、松江市西川津町3278の6番地にあり（第1図1）、前出の「山崎古墳」の東南方約50mの同丘陵尾根上（標高25m前後）に位置する。本丘陵の東西に延びる尾根が北東方向に変わる先端部にあるものを第1号墳、その南西隣りにあるものを第2号墳、平坦部を挟んで西側にあるものを第3号墳とし、第2・第3号墳間の平坦部をA・B地区、第2号墳の東側の微傾斜地をC地区、第3号墳の北東側微傾斜地をD地区とした。

「山崎古墳」（第1図2）は、一辺19m、高さ2mの方墳である。主体部は木棺直葬であり、この北東角から北側斜面にかけて幅20cm、深さ28cm、長さ4mの排水溝が存在した。出土品は、剣4振・刀1振・鏡2本、鐵鎧47本以上の鐵器のみを副葬し、通常認められる副葬品は皆無であった。築造は5世紀後半頃とみられる（注2）。

また、本丘陵の尾根沿いには、「馬込山古墳群と古墓群」があった（第1図3）。昭和44年の島根県教育委員会の調査によると、いずれも小規模の方墳や円墳などであったらしい（注3）。

本丘陵の東南方向200mの山林中には、「柴I・II遺跡」があった（第1図4）。昭和51年の島根県教育委員会の調査によると、5世紀前半頃の古式土師器を出土する堅穴式住居跡2軒と6世紀後半頃の古墳の周溝と思われる溝状遺構4が検出された（注4）。

さらに、南側へ500m離れた丘陵には、松江市立第二中学校移転用地内の調査で発見された「堤廻（つつみざこ）遺跡」がある（第1図5）。当教育委員会の調査の結果、18棟



第1図 周辺の遺跡分布図

の住居跡が検出されると共に、古式土師器片を中心とした多量の土師器片、山本編年のⅠ期～Ⅲ期の須恵器片や若干の玉類が出土した。この遺跡は、古墳時代の祭祀的性格の強い集落跡とみられる（注5）。

また、朝酌川が木丘陵の北から西側を通り南へと流れているが、この河川敷には、「西川津遺跡」（第1図6・注6）・「タチチョウ遺跡」（第1図7・注7）があり、縄文・弥生・古墳・歴史の各時代の土器・木製品など多種多様の遺物が出土している。

### III 調査の概要

#### (1) 第1号墳

##### ア、墳丘の構造（第2図）

南側が尾根を継続する幅1m・深さ25cm程の山道により変形しているが、発掘調査前の測量によれば、南北約8m・東西約9m・高さ約1mの不整形の円墳と思われた。

調査の結果、上端径約4.5m・下端径約7m・高さ約15cmの墳丘基盤を設け、その上に赤褐色土を盛った円墳であることが分かったが、盛土の流失が著しくその厚さは僅か30cm前後を計れるだけだった。周溝・埴輪・葺石は見当らなかった。

##### イ、遺構

主体部は確認できなかった。

##### ウ、遺物

第1号墳に関係する遺物はなかった。南西区画の旧表土中より、大きいもので5cm程度の土師器の細片が100片以上出土した（第6図）。

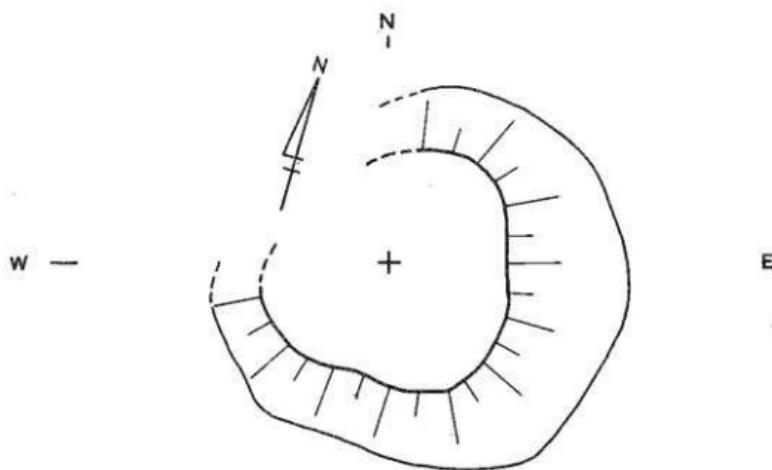
これは、推定頸部径12cmの複合口縁の壺形土器である。つまり、ゆるやかに彎曲する頸部から屈折して外反する複合口縁を持ち、肩部には横方向の刷毛目を施すものである（第11図1）。

#### (2) 第2号墳

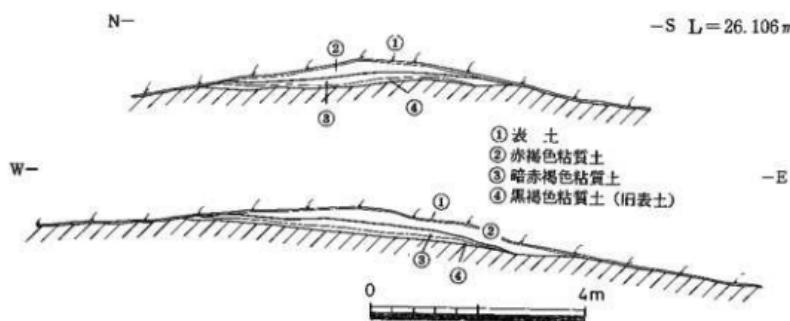
##### ア、墳丘の構造（第7図）

調査前の測量によれば、径約5m・高さ約1mの円墳と思われた。

調査の結果、上端径約5m・下端径約10m・高さ約10cmの円形の墳丘基盤を残し、その外側を幅約1.5mの平坦に切削加工していた。盛土は墳頂で約30～40cm、平坦部では15～20cmを計り、赤褐色を呈していた。



第2図 第1号墳調査後平面図

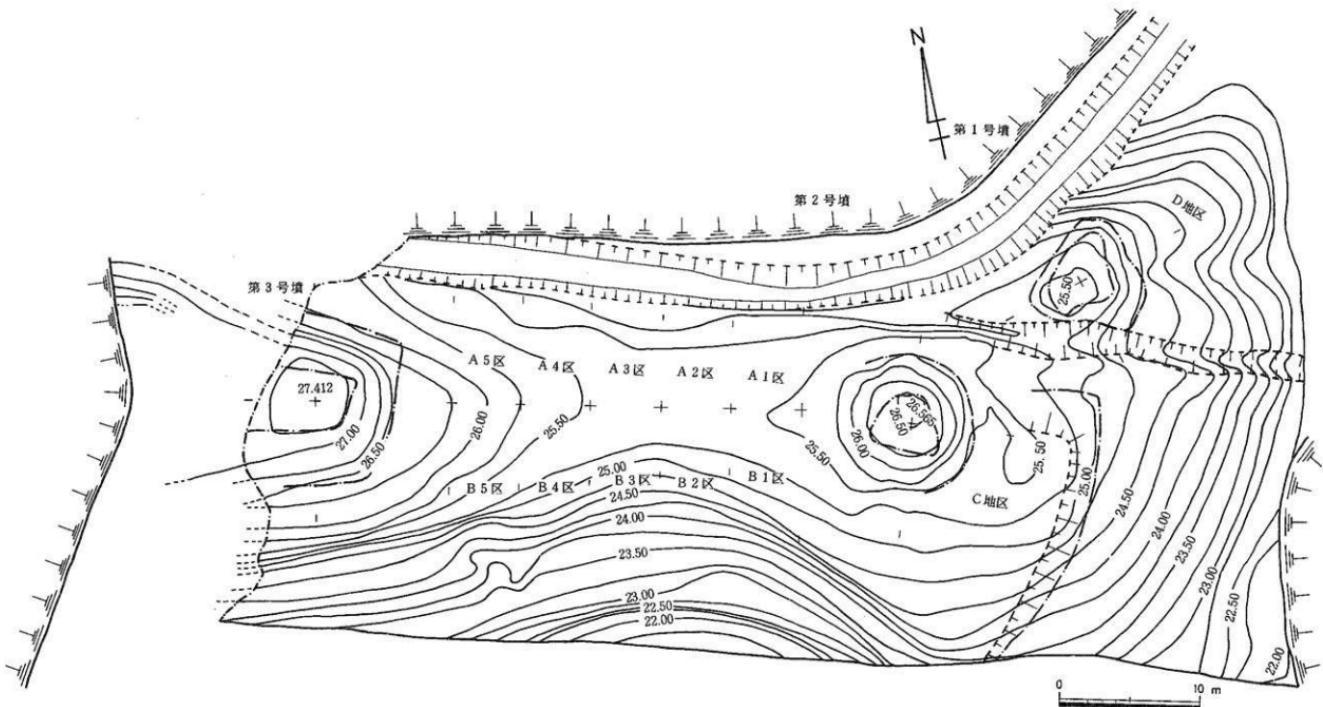


第3図 第1号墳埴丘断面図

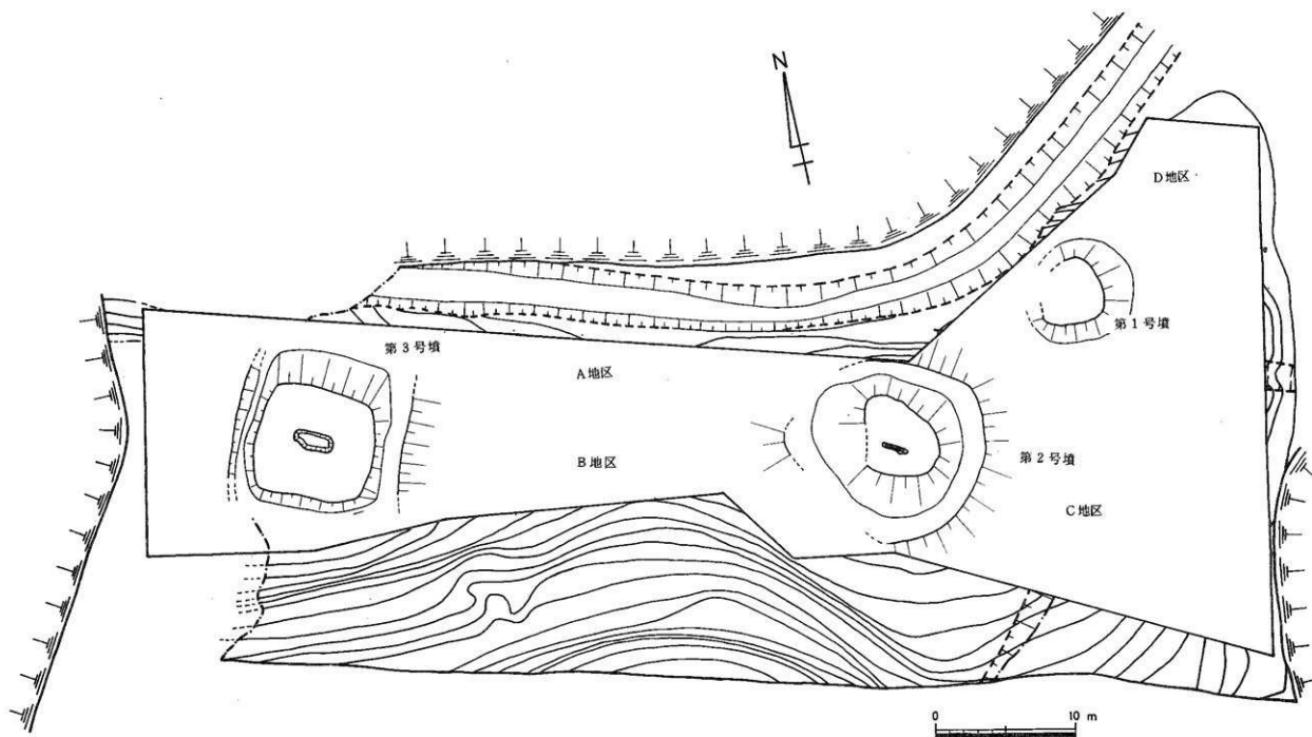
埴丘上には埴輪・疊石は見当らなかったが、南西区画を中心とする埴頂の表土や盛土中より須恵器の細片が100片程出土した（第9図）。

#### イ、遺構（第10図）

埴頂の盛土上面より、幅約30cm・長さ2m以上の東西にやや蛇行する長方形土塗と



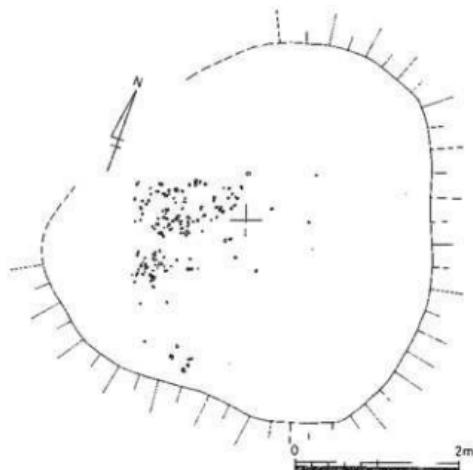
第4図 楊古墳群測量平面図



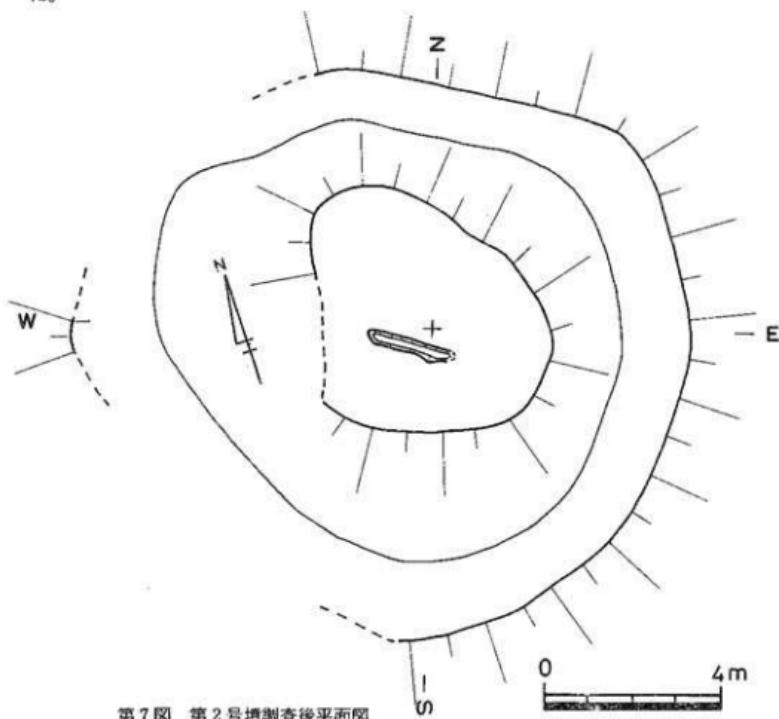
第5图 柴古墳群発掘調査後平面図

これを真中でたちきる形で  
径約1mの円形土壙が検出  
された。

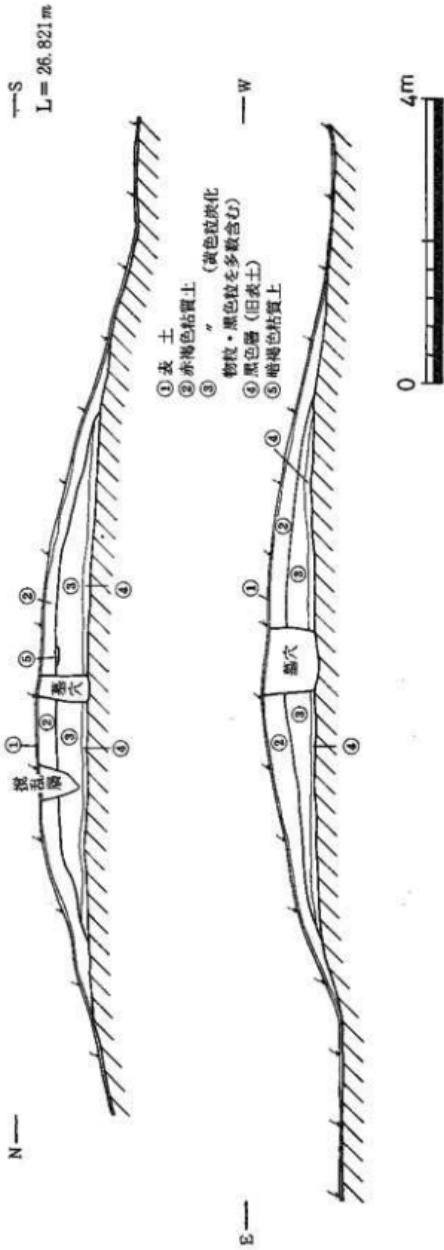
まず、円形土壙を掘り下  
げたところ、前述の須恵器  
と共に40cm位の深さより草  
食動物一体分の骨が検出さ  
れた。土地所有者の話によ  
ると、昭和10年代に山羊を  
このあたりに葬ったとのこ  
とで、それがこの土壙と思  
われたので調査を打ち切っ  
た。



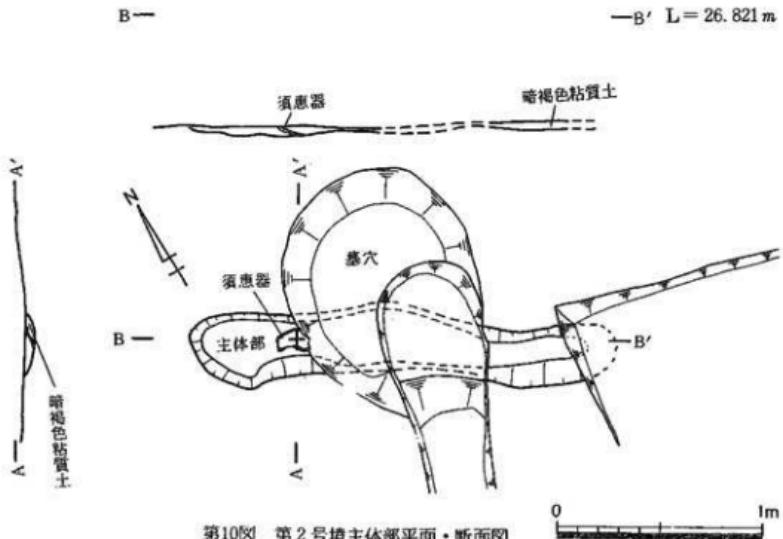
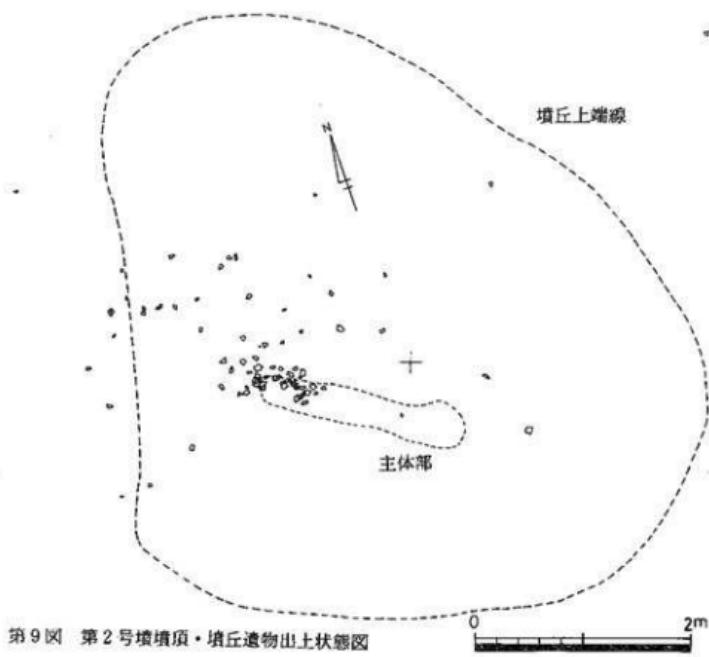
第6図 第1号墳墳頂部下土師出土状態図

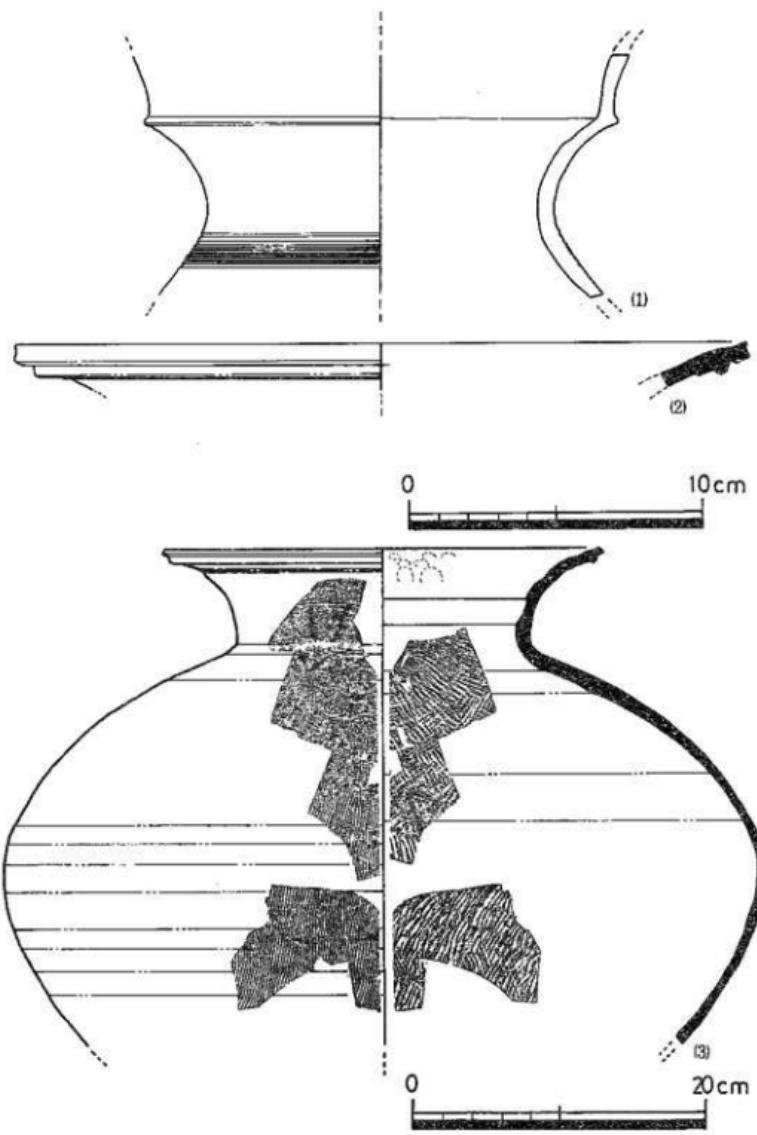


第7図 第2号墳調査後平面図



第8图 第2号填堆丘断面图





第11図 出土遺物実測図(1)

一方、長方形墓壙は深さ5cm位しかなく、その内に前述の須恵器1片が入り込んでいた。墓壙内の土は暗褐色を呈していた。他に遺構らしきもののがなく、本古墳の主体部と判断できよう。

#### ウ、遺物

第2号墳に関する遺物は、墳頂部の表土・盛土中より出土した須恵器の大型壺片しかない。1と2は同一個体の可能性もある。

1. 推定口径24.5cmの大型壺の口縁部片である。外反しながら開くものと思われる。口唇端部が角張り気味にやや上に突き出て、その下が屈折気味にさらに外側に広がっている。また、口縁外部には断面三角形の貼り付け突帯を持っており、その突帯の下に段がある。調整はナデが施されている。焼成は良好で、器面は濃青灰色を呈する（第11図2）。
2. 推定口径29.6cm・頸部径20cm・胴部最大径41.6cmの大型壺であり、図面上で復元したものである。口縁部は1と類似する点が多いので説明は除く。頸部の外面には板状工具による圧痕が残り、稜が薄く認められる。肩部から下の内外面には叩きが施されている。外面のそれは縦方向の平行叩きで、一条毎の幅が狭く凹凸が明瞭に残る。また、胴部付近ではその叩きを数条の横ナデにより消している。一方、内面のそれは、通常認められる同心円状の叩きとは異なり、多方向の平行叩きでしかもそれが重なり合っており、また肩部の一部では横ナデでそれを消しているところもある（第11図3）。

### (3) 第3号墳

#### ア 墳丘の構造（第12図）

墳丘の西側は重機に削られて崖になっており、墳丘上の所々も重機が移動した跡があり、地形がかなり変形していると思われた。測量によれば、南北約12m・東西10m以上・高さ約1.5mの方墳と思われた。

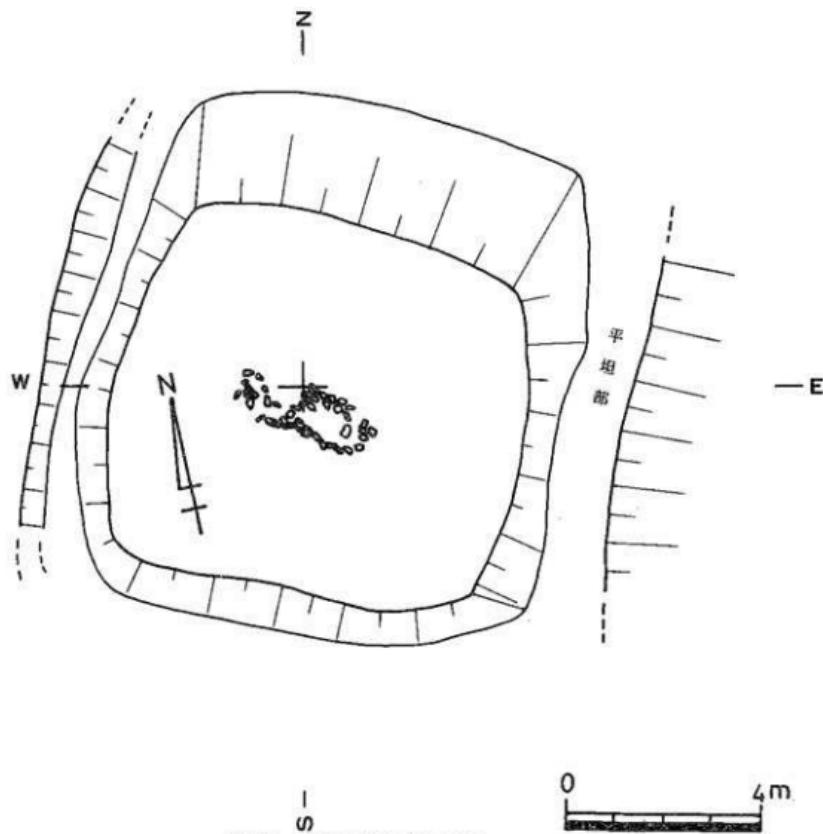
調査の結果、南北約11.5m・東西約10m・高さ約20cmの墳丘基盤を残し、その外側に溝と平坦部を形成していた。溝は西側に認められ、上端幅約2m・下端幅50cm・深さ約20cmを計り、その中には黒褐色土が堆積していた。平坦部は東側に認められ幅約1.5mを計る。墳丘基盤上に、墳丘で約15~20cm・墳壙で約5~10cmの赤褐色土を盛っている。

墳丘上には、埴輪・葺石は見当らなかった。

イ、造 構（第14図・第15図）

墳頂部で表土中より転石が露出しており、注意深く調査を進めたところ、主軸を北東—南西におく長さ約3m・幅約1mの長方形の石組が盛土上面より検出された。その内側の南西側には枕石と思われる転石が1個確認されると共に、その床には厚さ5~15cmで径約1cm程の小砾が一面に敷れており、砾床であることが分かった。このことより、これを主体部と判断した。

この主体部は、まず盛土中に長さ約3m・幅約1.5mの長方形の上墳を掘り、その後、転石を長方形に置くと共に内側に枕石を置き、転石の内側の床に小砾を敷きつめたものと考えられる。また、転石は少なくとも二段以上に積み上げられていたと思わ



第12図 第3号墳調査後平面図

れ、被葬者は、直接この石組内に納められたと考えられる。

副葬品は、墓床中より出土した上師器細片以外にはなかった。

#### ウ、遺物

土師器細片が2片墓床中より、陶磁器片が南側埴縁の赤褐色粘質土（盛土の流失土）中より出土しただけであった。

1. 土師器2片のうち、1片が図示できるもので他の細片は器形など不明である。

図示したものは口縁部として図示したが、擬口縁の可能性もある。それによると、推定口径5cmの古式の無頸壺となる（第16図1）。

2. 陶磁器は、推定口径9.8cmの唐津系の小型碗である（第16図2）。

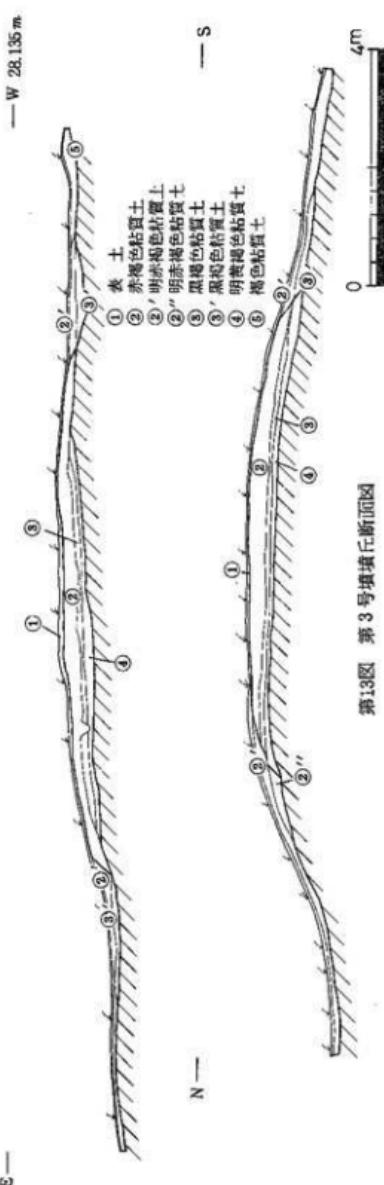
#### (4) A・B・C・D地区

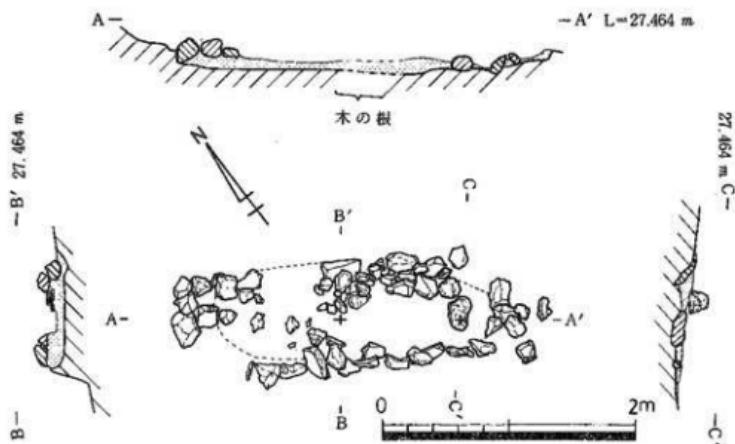
##### ア、A・B地区（第17図）

3区を中心とする自然的な凹みがあり、厚さ7~10cmの表上の下に赤褐色土が連なるが、2・3区には赤褐色土の上に明褐色土・黒褐色土が自然堆積していた。

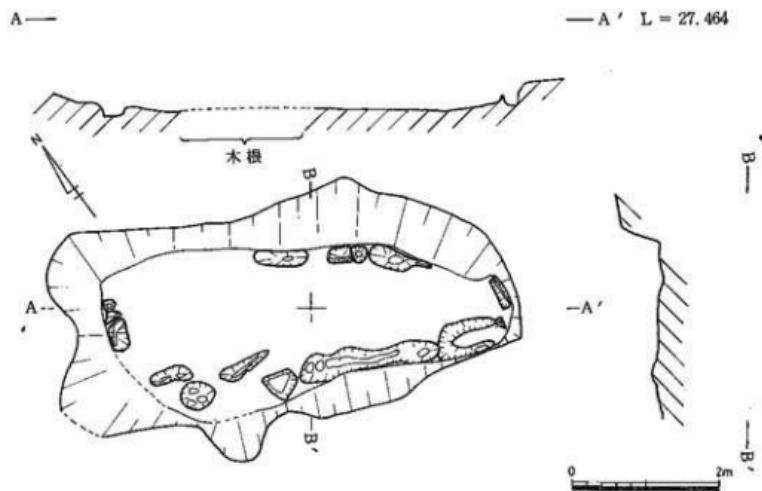
##### イ、C・D地区

厚さ約10cmの表の下はすぐ濃赤褐色の地山であり、構造は明らかでなかった。

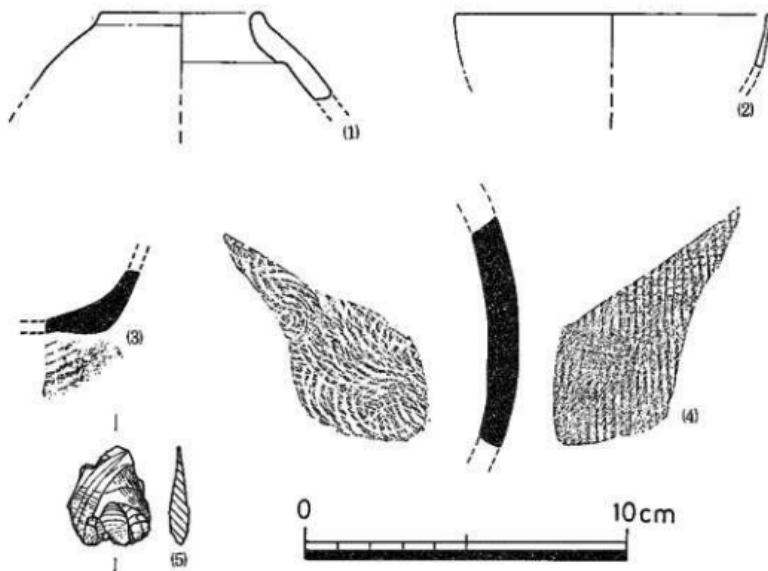




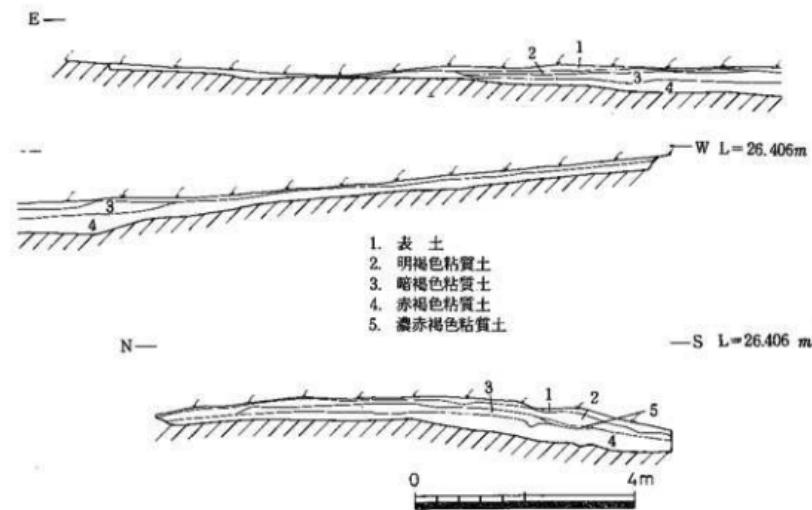
第14図 第3号墳主体部平面・断面図



第15図 第3号墳主体部石列排除後平面・断面図



第16図 出土遺物実測図(2)



第17図 A・B地区上層断面図

#### ウ、遺物（第16図）

A-3地区から須恵器片1片、A-3・4地区間から須恵器片1片、C地区から黒曜石片1片、D地区から須恵器片2片・土師器片1片・黒曜石片1片が出土したが、図示し得た土器は2片しかなかった。

1. A-3地区の暗褐色土中より出土したもので、底部に回転糸切りを持つ須恵器である（第16図3）。
2. A-3・4地区間の暗褐色土中より出土したもので、壺の胴部の破片である。外面は格子状の叩き、内面は通常見られる同心円状の叩きで調整されている。外面には自然釉がかかっている（第16図4）。
3. C地区の表土中より採集した黒曜石の剥片である（第16図5）。

## IV 小 結

### （1）遺物と遺構の検討

#### ア、遺物の検討

第1号墳の下の旧表土中出土の土師器の壺は、全体の器形は分らないが、口縁部の特徴より概ね『小谷式』を下らないものであろう。

第2号墳頂出土の須恵器の壺は、口唇端部の角張った状態や断面三角形の突帯の存在などの形態、内面の多方向の平行叩きの存在や外面の平行叩きを数条の横ナデで消去するなどの調整の特徴を有する。さて、この壺の特徴を『山木編年Ⅰ期』で知られている「薬師山古墳」の壺（注8）のそれと比較検討してみよう。「薬師山」の壺の特徴は、『頭部には……凸帯をめぐらし、胴部には……沈線を四段に描いている。内外面から叩いて作ったものであるけれども、内面の打痕は、かすかにその打痕を留める程度に平らにして仕上げられている』（注9）ことである。第2号墳の壺の口縁部下にも突帯が認められ、この点に於いては共通である。が、形状など詳細な点に於いては異なるようである。他の点に於いては共通する特徴がない。

比較検討の結果、第2号墳と「薬師山古墳」の壺は相違点が多いことに気づく。よって、県外に類似する特徴を有する須恵器を探したところ、「池の上墳墓群」（注10）などに口縁部の特徴が類似することが分った。だが管見によれば、内面調整の類似は未だ知らない。「池の上」の須恵器は『定型化した須恵器よりも古い要素』を持ち、「池の上」IV式の須恵器は5世紀中頃前後になるらしい。第2号墳の須恵器が「池の上」の何式

に類似するのかは今後の検討に待つが、少なくとも第2号墳の須恵器にも『定型化する以前の須恵器の要素』、つまりは『山本編年のI期よりも古い要素』が認められると考えられる。

第3号墳の礫床中出土の土師器も全体の器形が分らないために『古式土師器』の段階のものとしか言えない。

#### イ、遺構の検討

調査の結果、本古墳群は円墳二基・方墳一基で構成されていることや地山を切削加工し旧表土上に盛土し、第2・第3号墳は盛土上層に主体部を設けたものと分った（注11）。

また、第3号墳の主体部は礫床の一極と考えられ、床には小礫が敷かれていた。礫床を有する古墳は県内で18例程紹介されているが（注12）、本古墳と類似するのが「経塚山古墳」（注13）・「菅田ヶ丘古墳」（注14）であろう。この二古墳の主体部と本古墳のそれと比較検討してみると、本古墳は礫床面が平坦になっていること、礫床の小礫が枕石の下には及んでいないこと、枕石にやや加工した痕跡が認められること、などの理由により本墳の被葬者は礫床の上に直接埋葬されたことが分る。また、壁石は割石ではなく角張った転石である。つまり、第3号墳の主体部は、中期後半の「長砂古墳群」・「経塚山古墳」・「菅田ヶ丘古墳」のそれと類似する点があることが分った。

第2号墳の主体部は木棺直葬と思われる。また、この直上より古式の大型壺の細片が集中して出土したことは何らかの墳墓祭祀を示すのだが、須恵器細片を散布する例はこの時期では稀少であり、今後の調査例の増加を待ちたい。

一方、第1号墳下の旧表土中の古式壺の細片の出土状態も一種の墳墓祭祀を思わせるが、詳細なことが不明なので言及しかねる。

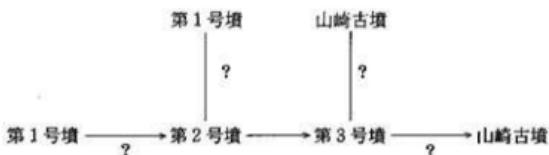
#### （2）周辺遺跡との関連

以上の結果より、第1号墳は『小谷』の時期かそれより少し下る時期に、第2号墳は『定型化する以前の須恵器』の時期に、第3号墳は中期後半に、各々築造されたと考えられる。つまり、本古墳群は『小谷』の墳から『山本編年I期の時期（5世紀後半頃）』までに形成されたわけである。

さて、本古墳群が立地する同一丘陵上にあった「山崎古墳」との関連についてであるが、「山崎古墳」からは現在最も編年的研究が進んでいる土器は1片も出土していない。

よって本古墳群と同じ土台に乗せることには無理があると考えるが、「山崎古墳」の発掘成果によると5世紀後半頃の築造と考えられている(第Ⅱ章参照)。つまり、「山崎古墳」の築造は本古墳群の形成時期とさほど隔たりはない時期と見なすことができる。

さて、柴古墳群と「山崎古墳」の築造順についてであるが、主体部の状態・出土遺物の検討より第2号墳が第3号墳よりも古いと言える。また、第1号墳は第2号墳と同じ時期頃かそれよりも古い時期に、「山崎古墳」は第3号墳と重複する時期に、各々築造されたと考えられる。これを模式図化すると下記のようになる。



最後に、「山崎古墳」が柴古墳群の中に含まれるか否かの問題が残ってしまったが、多種多様の考え方があると共に既述の理由により、ここでは言及しかねる。今後の調査例の増加・研究の進展を待ちたい。

注1 松江市教育委員会『松江市の埋蔵文化財一遺跡分布調査報告書一』 1980

注2 松江市教育委員会『山崎古墳』 1984.3

注3 石橋逸郎・近藤正 「松江・馬込山古墳群」(島根県教育委員会編『島根県埋蔵文化財調査報告書 第三集』昭和46年3月所収)

注4 島根県文化財保護協会『主要地方道松江-境線バイパス関係 埋蔵文化財調査報告』 1976.3

注5 注2に同じ

注6 島根県教育委員会『西川津遺跡詳細分布調査報告書』 昭和56年3月

注7 島根県教育委員会『朝御川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書-1-』 昭和54年3月

注8 山本清「島根大学敷地篆跡山古墳遺物について」(島根大学編『島根大学論集(人文科学)5号』 昭和30年2月所収;『山陰古墳文化の研究』昭和46年7月所収)

注9 山本清『山陰古墳文化の研究』 P 236

- 注10 甘木市教育委員会『池の上墳墓群（甘木市文化財調査報告 第5集）』1979 の中で、古い順より『池の上Ⅰ式』・『池の上Ⅱ式』・『池の上Ⅲ式』・『池の上Ⅳ式』と編年している。
- 注11 中尾秀信「長砂古墳群」（松江市教育委員会編『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983 所収）の中で、長砂古墳群の殆んどの主体部が盛土上層に位置し、そのことに注目している。
- 注12 松本岩雄「寺床1号墳関連資料一覧」（松江考古学談話会編『松江考古第5号』1983年4月所収）
- 注13 山本清「小規模古墳について」（島根大学編『島根大学論集（人文科学）13号』昭和39年3月所収）
- 注14 山本清「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」（島根大学編『山陰文化研究紀要第17号』1977年3月所収）





柴古墳群遠景（調査前）北からみる



手前 1号墳、向こうD地区調査前（南西からみる）



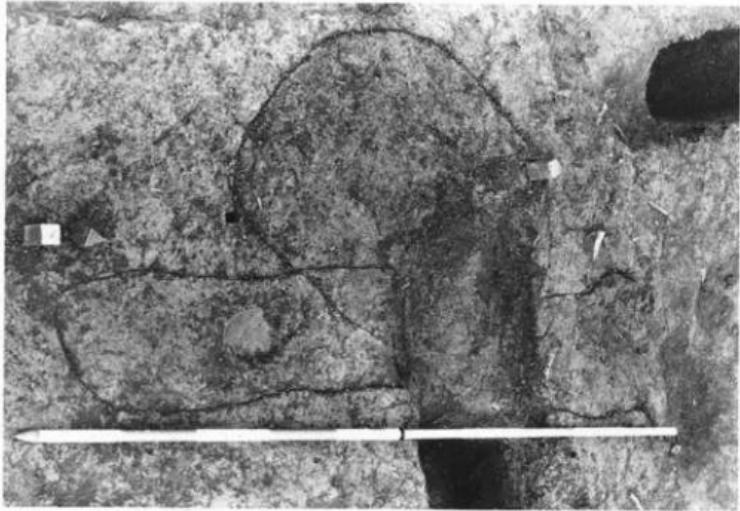
1号墳墳丘下旧表土中土師器出土状態



2号墳墳丘（調査前）北からみる



2号墳墳丘須恵器出土状態



2号墳主体部（西からみる）



2号墳埴丘（北からみる）



3号墳主体部砾床（西からみる）



3号墳石組主体部



3号墳墳丘（北からみる）



3号墳主体部砾（西からみる）



3号墳主体部石組除去後（西からみる）



A・B地区（西からみる）調査前



A・B地区（西からみる）調査後



C地区（北からみる）



C地区調査風景（西からみる）



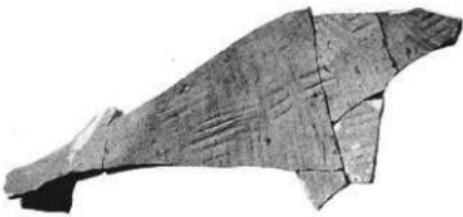
第11図 3

第11図 2

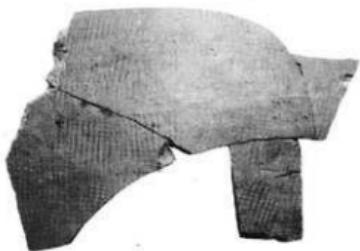
第11図 3



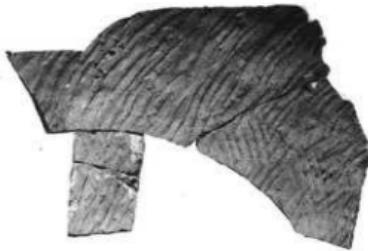
第11図 3



第11図 3



第11図 3



第11図 3



第11図 1

柴古墳群

昭和60年3月発行

発行 松江市教育委員会

印刷 有限会社谷口印刷

松江市母衣町89

004